

司竹監燒葦園因召都巡檢柴貽昂左藏以其徒會獵園下

司竹監葦園を燒く、因つて都巡檢柴貽昂左藏を召し、其の徒を以て園下に會獵す

官園刈葦留枯槎、
深冬放火如紅霞。
枯槎燒盡有根在、
春雨一洗皆萌芽。
黃狐老兎最狡捷、
賣侮百獸常矜誇。
年年此厄竟不悟、
但愛蒙密爭來家。
風迴燄卷毛尾熱、
欲出已被蒼鷹遮。

【字解】(一) 司竹監 元和郡縣志に、司竹園、周回百里、置監丞掌之。唐六典に、司竹監掌植葦園竹之事、副監爲之貳、凡宮掖及百官所須簾籠篋籠之屬、命工人擇其材幹以供之。(二) 都巡檢 宋史職官志に、諸縣巡檢司、有沿邊溪河都巡檢。(三) 左藏 職官志に、左藏、掌受四方財賦之人、以待邦國之經費。(四) 蒙密 蒙密、云云、蒙密は茂りて、まかなること、庾信が句に、蒙密兮見、韓退之が宴喜亭記に、猿狖所家、魚龍所宮。(五) 蒼鷹 鷹の一種、羽毛蒼白也。

野人來言此最樂、
徒手曉出歸滿車。
巡邊將軍在近邑、
呼來颯颯從矛叉。
戍兵久閒可小試、
戰鼓雖凍猶堪搥。
雄心欲搏南湖虎、
陣勢頗學常山蛇。
霜乾火烈聲爆野、
飛走無路號且呀。
迎人截來看逢箭、
避犬逸去窮投置。
擊鮮走馬殊未厭、
但恐落日催棲鴉。

帶ぶ、戰國策に、蒼鷹擊子殿上。(六) 颯颯 風のそよそよと吹く貌、楚辭九歌に、風飄飄兮木蕭蕭。(七) 可小試 史記、孫武傳に、吳王問曰、可小試勒兵乎。(八) 常山蛇 杜牧之の詩に、常山蛇陣勢縱橫。(九) 呀 口を張る、獨孤及の射虎園の詩に、鐵虎呀呀立當路。(一〇) 看逢箭 看は皮と骨と相離れる聲、莊子、養生主に、看然獨然、奕刀懸然。(一一) 擊鮮 鮮は仆す義、周官、大司馬に、擊鮮旂旗。(一二) 分置 爾雅に、鹿、牡鹿也、其子麕と見ゆ。(一三) 飲噴 漢書の霍光傳に、與從官飲噴。(一四) 古所吃 司馬相如の子虛賦に、收鹿、子虛過吃、烏有先生一言、僕對齊王曰、楚有七澤、嘗見其一、名曰雲夢、方九百里。又、秋田平青邱、彷彿乎海外、吞若雲夢者八

古今體詩 司竹監燒葦園因召都巡檢柴貽昂左藏以其徒會獵園下

弊旗仆鼓坐數獲。
鞍挂雉兔肩分獲。
主人置酒聚狂客。
紛紛醉語晚更譁。
燎毛燔肉不暇割。
飲啖直欲追羲媧。
青邱雲夢古所咤。
與此何啻百倍加。
苦遭諫疏說夷羿。
又被詞客嘲淫奢。
豈如閒官走山邑。
放曠不與趨朝衙。
農工已畢歲云暮。
車騎雖少賓殊嘉。

旗を弊し鼓を仆し坐して獲を數ふ、
鞍に雉兔を掛け肩に獲を分つ。
主人酒を置き狂客を聚め、
紛紛たる醉語晚に更に譁し。
毛を燎き肉を燔き割くに暇あらず、
飲啖直ちに羲媧を追はんと欲す。
青邱雲夢は古の咤する所、
此と何ぞ啻に百倍加はるのみならん。
苦に諫疏夷羿を説くに遭ひ、
又詞客に淫奢を嘲らる。
豈如かんや閒官山邑に走り、
放曠朝衙に趨るに與らざるに。
農工已に畢り歳云暮れ、
車騎少しと雖も賓殊に嘉なり。

九、於其會中、曾不帶芥。【一三】
諫疏說夷羿。左傳、襄公四年に、
魏絳曰、於虞人之歲、曰、在帝夷羿、
冒于原獸云云、於是晉侯好田、
故魏絳及之。又、前漢司馬相如傳
に、嘗て上に從ひて長揚に至りて獵
す。因りて疏を上りて諫む。【一四】
同客一本に賦客に作る。司馬相如、
揚子雲を指す。司馬相如の子虛賦
に、烏有先生曰、足下不稱楚王之
德厚、而盛推雲夢、以爲高臺、
淫樂、而顯侈靡、竊爲足下不取
也。揚雄傳に、上將大誇、胡人以
多禽獸、雄從至射熊館、還上長
楊賦、以諷諫。【一七】放曠、うち
開いて廣い。晉書、桓石秀の傳に、
性放曠、嘗弋釣林澤。【一八】朝衙
朝早く朝廷に出動する、白居易の詩
に、城上擊鼓、朝衙復晚衙。【一九】
獵、風の吹くこと、文選、飽獵の

酒酣上馬去不告。

酒酣にして馬に上り去つて告げず、

獵獵霜風吹帽斜。

獵獵たる霜風帽を吹きて斜なり。

【題義】英宗の治平元年十一月、東坡が蓋屋縣（陝西平安府、宋の時、鄂、蓋屋一監、鳳翔に在り。）に
赴いた時、たまたま司竹園の監が葦園を焼いた。（蓋屋縣の南界、芒水の曲に竹林が多い。）因りて都巡
檢柴貽昂左藏を召して、其の徒を以て園下に會獵し、鹿を炮り、兎を燔き、豪飲して歸り詩を作る。
【詩意】芒竹園は、蓋屋縣に在る。其の園の葦を焼くは、官司の年例である。葦を刈り、枯槎を焼く
も、槎の葉は、春雨に逢うて萌芽する。黃狐や老兔は最も狡猾敏捷で、百獸を驅しては、自ら誇つて
居る。而も年年此の厄あることを悟らない。ただ茂つて密なる處を愛して、争ひ來つて隠れ家を造る。
風廻り、焰巻いて、毛も尾も熱くなり、出ようと思つても、已に蒼鷹に遮られる。野人來り言ふ、こ
れ最も樂し、曉に出たときは徒手でも、歸るとき、獲物は車に滿つと。巡邊の將軍は近邑に在つて成
兵を呼び集めると、颯颯として矛又（刺股）を從へる。成兵は久しく閒で、武事に習はないから、少
しく試みるべく、戰鼓は凍つても、猶ほ搥つに堪へる。雄心が勃勃として起り南澗の虎を搏たうとす
る。狩場に於ける陣勢は、常山の蛇を學ぶ。（常山の蛇といふは、其の首を撃てば尾應じ、其の尾を撃
てば首應じ、其の中を撃てば、首尾俱に應るのである。）霜乾き、火烈しく、聲が野に裂け破れる。
飛び走るに路なく、號び且つ呀する（口を張る）人を迎へ截り來つて、若然として箭に中るもあれば、
獵犬を避け、逸し去つて、進退谷まつて置に罹るもある。鮮（新しい肉）を撃ち、馬を走らして厭く

ことを知らない。ただ恐る、落日栖鴉の鳴くを催すを、旗を弊し鼓を仆して今日の獲物を數へる。鞍に雉や兔を掛け、肩には麈を分ける。主人は酒宴を開いて狂客を聚め、紛紛たる醉語は、晩となつて、更に八釜しい。毛を焼き肉を燻き、之を割くに暇がない。飲み啖ふこと、直に伏羲氏女媧氏の古代に返らうとする。(禮記に、昔者、先王未レ有レ火化、食ニ鳥獸之食、茹毛飲血。)子虛の賦にある青邱の話や、雲夢大澤の話は、古人が世に咤つた所である。其の大きいことは、之よりも百倍加はるばかりではない。而も當時は懇に諫疏を上つて曰く、帝夷羿が篡立するに及び、原野にすむ獸類をのみ冒り取らうとして、其國の大事を打ち忘れ、只管、田獵の事のみを考へたから、其の終りを好くしなかつたと。魏絳は、虞人の箴を引いて、晉侯を諫めたのである。又司馬相如や揚子雲等の詞客にも淫奢を嘲けられる。して見ると、閒官となつて山邑に走り、放曠、林澤に弋釣し、朝早く出勤するやうな面倒なことには與らない方がよい。農事工事も、已に畢つて、歳ここに暮れ、車騎は少いが、賓客は殊に嘉である。酒酣にして馬に騎つて去る。獵獵たる霜風は、帽を吹いて斜である。(北史に、獨孤信嘗因獵、日暮馳馬入城、其帽微側、詰且吏民有戴帽者、咸慕信而側帽焉。)

和子由木山引水二首

子由が木山に水を引くに和す 二首

蜀江久不見滄浪。

蜀江久しく滄浪を見ず、

江上枯槎遠可將。

江上の枯槎遠く將ゆべし。

【字解】

【一】木山 木假山。老泉の木假山記に詳なり。【二】滄浪 漢水のことであるが、ここは水色を

去國尙能三犢載。

國を去りて尙は能く三犢に載す、

汲泉何愛一夫忙。

泉を汲む何ぞ愛まむ一夫の忙はしきを。

崎嶇好事人應笑。

崎嶇好事人應に笑ふべし、

冷淡爲歡意自長。

冷淡爲に歡び意自から長し。

遙想納涼清夜永。

遙に想ふ納涼清夜永く、

窗前微月照汪汪。

窗前の微月汪汪を照らすを。

【題義】子由の木山引水詩に、引水穿簷接竹梢、谷藏峰底大容瓢、將流旋滴廬山瀑、已盡還

來海上潮、亂點落池驚睡覺、半山含潤沃心焦、瓦盆一斛何勝滿、溢去猶能浸菊苗、其の二にいふ、簷下枯槎拂荻梢、山川迤邐費公瓢、幽泉細細流巖鼻、盆水瀾瀾漲海潮、但愛堅如湖上石、誰憐收自甕中焦、蒼崖寒溜須佳蔭、尙少冬青石蘭苗、此詩に和したのである。

【詩意】蜀江も久しく滄浪の水色を見ないから、江上の枯れた槎は遠く行くべきである。國を去るも尙は能く三犢に載ることが出来る。泉を汲むには、一夫を勞すれば事足る。我の崎嶇(山のけはしきより轉じて人の困難の状をいふ)物好きには、人まさに笑ふことであらう。併し、世味に冷淡でも、心は自ら長閑である。遙にそなたの方を思ふに、納涼清夜の永くして、窗前の微月は汪汪(水の廣く深いことより轉じて度量の廣きに喩ふ)の心を照らすことであらう。

千年古木臥無梢。 千年の古木臥して梢なく、
 浪捲沙翻去似瓢。 浪沙を捲いて翻して去つて瓢に似たり。
 幾度過秋生蘚暈。 幾度か秋を過ぎて蘚暈を生じ、
 至今流潤應江湖。 今に至るまで流潤江湖に應ず。
 泫然疑有蛟龍吐。 泫然として蛟龍吐くあるかと疑ふ、
 斷處人言霹靂焦。 斷つ處人は言ふ霹靂焦すと。
 材大古來無適用。 材大にして古來適用なし、
 不須鬱鬱慕山苗。 須ひず鬱鬱として山苗を慕ふを。

【字解】 霹靂焦 唐柳宗元の霹靂琴簧序に、始枯樹生石上、説者言、蛟龍伏其窟、一夕暴震火之、焚之且乃已、其餘聲然倒臥道上、超道人取以爲琴。 適用 晉書職官志に、或爾時適用。

【詩意】 千年の古木は、臥して梢もなく、浪は沙を捲いて、翻して去つて瓢の形を成す。幾度か秋を過ぎて、木の上に蘚の暈を生じ、今日に至るまでも、江湖に潤されて居る。(江に潮が来ると、枯木が相潤ふ。恰も相應するがやうである。)泫然として(涙の流れる貌)蛟龍が吐いたのかと疑はれる。古木の斷つた處は、霹靂の焦したものだといふ。古來、材大なれば用を爲し難いと、(杜子美の詩に、志士幽人莫怨嗟。古來材大難爲用。)鬱鬱として山上の苗を慕ふにも及ぶまい。(左太沖の詠史に、鬱鬱湖底松。離離山上苗。以彼徑寸莖。蔭此百尺條。)

和子由苦寒見寄

人生不滿百。 一別費三年。
 三年吾有幾。 棄擲理無還。
 長恐別離中。 摧我鬢與顏。
 念昔喜著書。 別來不成篇。
 細思平時樂。 乃爲憂所緣。
 吾從天下士。 莫如與子歡。
 羨子久不出。 讀書蟲生氈。
 丈夫重出處。 不退要當前。
 西羌解仇隙。 猛士憂塞壩。
 廟謨雖不戰。 虜意久欺天。
 山西良家子。 錦緣貂裘鮮。
 千金買戰馬。 百寶粧刀鐔。
 何時逐汝去。 與虜試周旋。

子由が苦寒に寄せらるるに和す

人生百に満たず、一別三年を費す。
 三年吾幾かある、棄擲して理還るなし。
 長く恐る別離の中、我が鬢と顔とを摧くを。
 念ふ昔著書を喜む、別來篇を成さず。
 細思平時の樂み、乃ち憂の緣る所となる。
 吾天下の士を従ふるは、子と歡するに如くはなし。
 羨む子久しく出でず、書を讀んで蟲氈に生ず。
 丈夫出處を重んず、退かずして當に前むべきを要す。
 西羌仇隙を解し、猛士塞壩を憂ふ。
 廟謨はすと雖も、虜意久しく天を欺く。
 山西良家の子、錦緣貂裘鮮し。
 千金戰馬を買ひ、百寶刀鐔を粧ふ。
 何れの時か汝を逐うて去らしめ、虜と試みに周旋せん。

【字解】【一】苦寒 杜市の詩に、雙夷長老想苦寒。【二】人生不滿百 文選古詩に、生年不滿百、當懷千歲憂。【三】從天下士 史記魯仲連の傳に、新垣衍起再拜、謝曰、始以先王爲主、吾乃今日知先生爲天下之士也。【四】西羌解仇 前漢書、趙充國傳に、元康三年、先零與諸羌種亮二百餘人、解仇交、實盟盟、仇言ある毎に、往來相報いたものを、仇を解いて實を交へるものは、自ら相親結し、漢に入りて還をなさんとするのである。【五】塞垣 塞垣は塞垣、増は牆外の短き垣、漢書、申屠嘉傳に、太上皇廟垣、註にいふ、宮外垣餘地也。垣は増と同じ。【六】廟諱 杜子美の詩に、廟諱書長策、後漢光武紀贊に、明明廟諱。【七】山西良家子 前漢趙充國傳に、以六郡良家子、善騎射。又、贊にいふ、山西出將。【八】千金買戰馬 云云 杜子美の詩に、千金裝馬、百金裝刀頭。【九】與虜周旋 左傳、僖公二十三年に、重耳曰、左執鞭弭、右屬櫜鞬、以君周旋。晉書に、令將士周旋。

【題義】此詩は嚴しい寒さの時、子由が寄せられた詩に和したもので、治平元年十一月の作である。紀昀いふ、此不不得志之憤詞、不必實有此想也と。

【詩意】人生は百に満たない。貴い光陰を一別三年も費した。(東坡は嘉祐六年十一月、鳳翔の任に赴き、治平元年に至る。正に三年である。)三年といへば永いが、吾に幾もなかつた。棄擲したものは、悔みても還る道理はない。いつも恐れるのは、別れて居る間に、我が鬢と顔とが摧け衰へることである。昔は著書を喜んだ我も、別れて後は、一篇も出来ない。細思して文を成すは平生の樂であつたが、今は却て憂の縁となる。天下の士を従へるは、人の欲する所であらうが、吾は子と共に歡する方がよい。子が久しく門を出でないで、朝夕書物に親しみ、蝨の甕に生ずるを覺えない境遇は、まことに羨しい。丈夫は出處進退を重んずる。退かないで、當に前むべきである。西羌は今や仇隙を解いて

團結を固うした。漢に入つて寇を爲す準備ではあるまいか。言ふまでもなく、朝廷の議は、戰を欲しないが、虜の意は、いつも朝廷を欺いて、平和を破る。(夏人大舉して邊を犯す。王素に詔して之を治めしむ。素至るに及び、夏人即日解け去る。)昔から山西は將を出すと言ひ傳へ、風俗武勇を尙び、良家の子も錦繡貂裘(てんの皮で作つた裘)のものが少い。千金で戰馬を買ひ、百金で刀頭を裝ふ。何れの時か、汝を逐うて行かしめ、虜と戰を交へたいものである。

寄題興州晁太守新開古東池

興州晁太守新に古東池を開くに寄せ題す

百畝清池傍郭斜、
居人行樂路人誇。
自言官長如靈運、
能使江山似永嘉。
縱飲座中遺白蛤、
幽尋盡處見桃花。
不堪山鳥號歸去、
長遣王孫苦憶家。

【字解】【一】興州 漢中府、興安州。【二】晁太守 名は仲約。

【三】行樂 樂みをなす、揚惲の詩に、人生行樂耳、須富貴何時。李白的詩に、行樂須及春。【四】似 永嘉 太平寰宇記に、永嘉有南亭、北亭、白岸亭、楠溪、石帆、石室、謝公池、謝公巖諸名勝、靈運皆有詩。【五】白蛤 蛤をいふ、魏初、白蛤の製あり、猶ほ白接勝、白輪巾の如し。白蛤は晉書、五行志に、白

按蘇山簡傳に、白輪巾に謝靈運に見ゆ。【六】見桃花、陶淵明記に、晉武陵人、捕魚爲業、緣溪行、逢桃花林。【七】歸去、子規啼いていふ、不歸如歸去。【八】王孫、楚辭に、王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋。

【題義】此詩は治平元年十二月の作である。文與可の東池晴碧亭に題する詩に、鄭谷題詩處、荒涼不復知、使君來問日、景物欲歸時とある。新に古東池を開いたので、特に詩を寄せ題したのである。

【詩意】百畝の清池は、城郭に傍うて斜になつて居る。ここに住つて居る人は、ただ行樂に其の日を送り、路行く人も、觀光を誇つて居る。皆いふ官長は昔の謝靈運のやうであるから、能く江山をして永嘉郡の如からしめると。(宋書に、謝靈運爲永嘉太守、郡有名山水、素所愛好、既不得去、遂肆意遊遊、所至輒爲詩詠以致其意。)永嘉郡には名勝が多い。酒を十分に飲んで、座中に白恰を遺れ、幽尋して盡くる處に桃花林を見る。山鳥の不如歸去と鳴くを聞くに堪へない。遊んで歸らない王孫をして苦に家郷を思はしめる。

華陰寄子由

華陰子由に寄す

三年無日不思歸

三年日として歸るを思はざるなし、

夢裏還家旋覺非

夢裏家に還つて旋非を覺ゆ。

臘酒送寒催去國

臘酒寒を送りて去國を催し、

東風吹雪滿征衣

東風雪を吹いて征衣に滿つ。

【字解】【一】華陰、元和郡縣志に、華州華陰縣、漢屬弘農郡。【二】臘酒、岑參詩に、臘酒飲未盡。【三】三峰、名山記に、華岳有三峰、直上數千仞、基廣而峰峻、有削削成。【四】扇行看云云、韓退之の詩に、荆山已去華山來、日出流關四扇開。

三峰已過天浮翠、
四扇行看日照扉、
里塚消磨不禁盡、
速攜家餉勞驂駢。

三峰已に過ぐ天の浮翠、
四扇行くゆく看る日照の扉、
里塚消磨盡くるを禁せず、
速かに家餉を攜へて驂駢を勞す。

に在るもの、蔡邕の文に、車服照路、驂駢如舞。

【題義】治平元年十二月、東坡が華陰縣に至つた時、子由に寄せた詩である。太華山は縣の南八里に在る。詩中に三峰とあるは、太華の三峰である。

【詩意】家を離れて三年、一日として歸るを思はないことはない。夢の中に、家に還つたが、暫くして其の然らざるに氣付いた。臘酒(十二月祭日に用ふ)を飲んで寒を送るも、去國の念を催し來る。既にして春風は雪を吹いて旅衣に滿つるも、太華の三峰は、已に天の浮翠である。四方がだんだんに照らされる。一里塚を消して無くし、速に家餉を攜へて出發しよう。

和董傳留別

董傳の留別に和す

蠶繒大布裹生涯

蠶繒大布生涯を裹み、

腹有詩書氣自華

腹に詩書あり氣自ら華なり。

【字解】【一】董傳、字は至和、洛陽の人。詩名あり。嘗て風翔に在りて、東坡と相従ふ。【二】蠶繒大布、縞は帛の總名、古は帛といひ、

厭伴老儒烹瓠葉。
 強隨舉子踏槐花。
 囊空不辦尋春馬。
 眼亂行看擇堵車。
 得意猶堪誇世俗。
 詔黃新濕字如鴉。

漢代は猶といふ。陶潛の詩に、大布
 簞以應餽。【一】腹有詩書
 韓退之の詩に、由來腹有詩書。【二】
 烹瓠葉。詩小雅に、幡幡瓠葉采之
 烹之。幡幡は、ひるがへる貌。【三】
 舉子。官吏の登用試験に應ずる人。
 【四】尋春馬。孟郊及第の詩に、春
 風得意馬蹄疾、一日看盡長安花。
 【五】擇堵車。唐進士の開宴は、常

【題義】此詩も治平元年十二月の作、東坡が鳳翔を罷めて朝に還る時、董傳の寄せた詩に和したのである。紀昀いふ、句句老健。又曰く、結二句乃期許之詞、言外有炎涼之感、非有所不足於董傳也と。

【詩意】人は清貧を向ふ、蠶帛大布で生涯を裹めるも、腹に詩書を蓄へれば、氣自ら華かである。老儒に伴つて瓠葉を烹るを厭ひ、後漢書に、劉昆教授弟子、恆五百餘人、每春秋饗射、常備三列典儀、以素木瓠葉爲俎豆。強ひて舉子（試験に應ずる人）と槐花を踏む。（長安の舉子、六月より後、落第者は京に出ない。之を過夏といふ。多くは靜坊廟院を借りて新文章を作る。之を夏課といふ。時に語して曰く、槐花黄、舉子忙と。）財囊も空しくなつて春を尋ねる馬を辨じられない。眼亂れて行くゆ

く看る婿を擇ぶの車を。（王文誥いふ、董傳未娶、故有此句。）意を得ては猶ほ世俗に誇るに堪へる。其れは黄麻紙を用ひた詔書が新に濕うて字は鴉のやうである。（盧仝の詩に、閒來案上翻墨汁、塗抹詩書一如老鴉。）

西蜀楊者二十年前見之甚貧。今見之亦貧。所
 異於昔者蒼顏華髮耳。女無美惡。富者妍。士無
 賢不肖。貧者鄙。使其逢時遇合。豈減當世之士
 哉。頃宿扶風驛舍。聞泣者甚怨。問之。乃昔富而
 今貧者。乃作一詩。今以贈楊君。

西蜀の楊者二十年前、之を見るに甚だ貧し、今之を見る亦貧し、昔に異る所の者は、蒼顏華髮のみ、女は美惡となく富めるものは妍、士は賢不肖となく貧きものは鄙、其をして時に逢ひ遇合せしめば、豈當世の士に減せんや、頃扶風驛舍に宿す、泣く者を聞くに甚だ怨む、之を問へば乃ち昔富みて今貧しきもの、乃ち一詩を作る、今以て楊君に贈る

孤村微雨送秋涼。孤村微雨秋涼を送り、

【字解】【一】楊者（者一に聲に

逆旅愁人怨夜長。 逆旅の愁人夜の長きを怨む。
 不寐相看惟握馬。 寐せずして相看るは惟握馬、
 悲歌互答有寒蟄。 悲歌互に答ふるは寒蟄あり。
 天寒滯穗猶橫畝。 天寒うして滯穗猶畝に横はり、
 歲晚空機尙倚牆。 歲晩れて空機尙牆に倚る。
 勸爾一杯聊復睡。 爾に一杯を勸めて聊か復睡らしむ、
 人間貧富海茫茫。 人間の貧富は海茫茫。

作る。應試の秀才であつたが、學未だ成らず、行囊已に竭きたもの。
 【一】 蒼頭華髮 年老いて衰へたるもの。顔と髮、歐陽修、醉翁亭記に蒼頭白髮。晉、傅玄の詩に、十五入君門、一別終華髮。【二】 遇合 時に合ひて用ひられる。史記叔孫通傳に、力田不若逢年、善仕不若遇合。【三】 扶風驛合 一本に長安驛合に作る。【四】 微雨 一本に漸雨に作る。

【六】 送秋涼 送の字、一本に逐に作る。【七】 逆旅 客舍をいふ、左傳、魯公二年逆旅の疏に、逆、迎也、旅、客也、迎、止賓客之處也と見ゆ。【八】 握馬 杜子美の守歲詩に、盡管喧握馬。【九】 寒蟄 方音の註に、寒蟄也と。【一〇】 滯穗 とり漏らした種、詩、小雅に、彼有不穫粟、此有不穫穗。【一一】 空機 柳子厚の詩に、機杼空倚壁。【一二】 勸爾一杯 孫皓の爾汝歌に、曾與女爲郎、今與汝爲臣、上汝一杯酒、令汝壽萬春。

【題義】 西蜀の楊耆、來り謁したが、貧甚しく、同情に堪へなかつたから、曩に扶風驛で貧に苦んで居たものを詠じた詩を楊君に與へた。即ち雨の夜、扶風驛の逆旅で歌ふものの聲が悲しいので、之を問へば、昔は富みて今貧しくなつたものである。東坡は憐然として之に酒を飲ませ一詩を作つた。今日寒雨が止まない。忽ち其の事を憶ひ、且つ楊君の棧運は逆旅の貧者と異なることを念つて其の詩を出して贈つたのである。

【詩意】 扶風の一驛、微雨と共に秋涼を送り、客舎の愁人は寐られないで、夜の長きを怨む。厩の馬と相看、秋の蟲と悲歌を交へて居る。天が寒うして、取り漏らした穗が、まだ田畝に横はつて居る。歳が晩れて、空の機織道具も壁に倚りかかつて居る。爾に一杯の酒を勸めて睡らしめる。(昔、晉の孝武帝の末年に、長星(慧星をいふ)が見はれた。帝は心に甚だ之を惡み、華林園で酒を擧げ、之を祝して、長星勸汝一杯酒、自古何有萬歲天子耶、と言つたことがある。)人間の貧富は測られない。恰も海の茫茫たるやうなものである。

夜直祕閣呈王敏甫

夜祕閣に直して王敏甫に呈す

蓬瀛宮闕隔埃氛。 蓬瀛宮闕埃氛を隔つ、
 帝樂天香似許聞。 帝天香を樂みて似に聞かしむ。
 瓦弄寒暄駕臥月。 瓦は寒暄を弄して駕月に臥し、
 樓生晴靄鳳盤雲。 樓は晴靄を生じて鳳雲に盤る。
 共誰交臂論今古。 誰と共に臂を交へて今古を論せん、
 只有閒心對此君。 只閒心此君に對するあり。

【字解】 【一】 祕閣 崇文院中に在る。毎夜校理、校勘一人を輪して直宿せしむ。宋の時の祕閣の秩は、三館(昭文・集賢・史館)に觀へて、較卑かつた。【二】 蓬瀛 蓬萊と瀛洲。拾遺記に、歷蓬瀛而超碧海。之に方丈を合せて三神山といふ。【三】 埃氛 宋史、王素傳に、埃氛屬。

大隱本來無境界。 大隱は本來境界なし、
北山猿鶴漫移文。 北山の猿鶴漫に移文。

【題義】英宗の治平二年、東坡は鳳翔から召還されて秘閣に入り、次で史館に直することとなつた。
【詩意】神仙の宮闕は、絶えて塵はこりの氣がない。帝は天香を愛されて、遙かに聞かされる。死の冬の日光に浴して居るは、鶯の月に臥したやうであり、樓上に晴靄の生ずるは、鳳鳥の雲に盤るやうである。誰と臂を交へて今古を論じよう。(九州春秋に、韓遂、樊稠交臂相加、共語良久。)只聞なると、かの北山移文にある夜鶴怨み、曉猿驚くの況は、草堂のみに限らない。此處にも寂寥はある。(鍾山は、都の北に在るから、北山といひ、所在に移し示す書であるから移文といふ。)

謝蘇自之惠酒 蘇自之酒を惠まるるを謝す
高士例須憐麴蘖 高士例須らく麴蘖を憐れむべし、

【字解】【一】麴蘖 かうち(酒を醸す酒母)轉じて酒のこと用ふ、
【二】高士 高士の文に、柳下惠、東方朔、達人也。賈誼の鶴鳥賦に、達人犬豕兮、物亡不可。【三】景山 魏志に、徐邈字景山、魏亡びて晉に歸す。太傅謝安之を擧げて中書舍人に補す。【四】阮籍 晉書阮籍傳に、傲然獨得、任性不羈、嗜酒能嘯。【五】畢卓 畢卓字叔高、晉書に、畢卓、字茂世、太興末爲東都郎、常飲酒廢職、比舍郎頗熟、卓因醉夜至、其寢間、盜飲之、爲掌酒者之所縛。【六】劉伶 字伯倫、阮籍、嵇康と相遇ひ、欣然として神解す。常に鹿車に乗り、一壺酒を攜へ、人をして銜を荷うて之に隨はしめ、謂つて曰く、死便埋我と。【七】杜陵詩客 杜市をいふ。長安杜陵の東南十餘里、又一陵あり、少陵といふ。陵西に杜市の舊宅がある。【八】羅列八子 飲

此語常聞退之說。 此語は常て退之が説に聞く。
我今有說殆不然。 我今説あり殆んど然らず、
麴蘖未必高士憐。 麴蘖未必しも高士に憐まれず。
醉者墜車莊生言。 酔ふもの車より墜つ莊生いふ、
全酒未若全於天。 酒を全うするは未だ若かず天を全う！
達人本是不虧缺。 達人は本是れ虧缺せず、
何暇更求全處全。 何の暇あつて更に全處の全きを求めん。
景山沈迷阮籍傲。 景山は沈迷し阮籍は傲る、
畢卓盜竊劉伶顛。 畢卓は盜竊し劉伶は顛す。
貪狂嗜怪無足取。 貪狂嗜怪取るに足るなし、
世俗喜異矜其賢。 世俗異を喜み其の賢に矜る。
杜陵詩客尤可笑。 杜陵の詩客尤も笑ふべし、
羅列八子參羣仙。 羅列の八子羣仙に參す。
流涎露頂置不説。 流涎頂を露し置いて説かず、

之逸邪。【一】達人 道理に通達せる人、嵇康の文に、柳下惠、東方朔、達人也。賈誼の鶴鳥賦に、達人犬豕兮、物亡不可。【二】景山 魏志に、徐邈字景山、魏亡びて晉に歸す。太傅謝安之を擧げて中書舍人に補す。【三】阮籍 晉書阮籍傳に、傲然獨得、任性不羈、嗜酒能嘯。【四】畢卓 畢卓字叔高、晉書に、畢卓、字茂世、太興末爲東都郎、常飲酒廢職、比舍郎頗熟、卓因醉夜至、其寢間、盜飲之、爲掌酒者之所縛。【五】劉伶 字伯倫、阮籍、嵇康と相遇ひ、欣然として神解す。常に鹿車に乗り、一壺酒を攜へ、人をして銜を荷うて之に隨はしめ、謂つて曰く、死便埋我と。【六】杜陵詩客 杜市をいふ。長安杜陵の東南十餘里、又一陵あり、少陵といふ。陵西に杜市の舊宅がある。【七】羅列八子 飲

爲問底處能逃禪。爲に問ふ底の處にか能く禪を逃る。
 我今不飲非不飲。我今飲ます飲まざるにあらず、
 心月皎皎常孤圓。心月皎皎常に孤圓。
 有時客至亦爲酌。時あつて客至る亦爲に酌む、
 琴雖未去聊忘絃。琴未だ去らずと雖も聊か絃を忘る。
 吾宗先生有深意。吾宗先生深意あり、
 百里雙罌遠將寄。百里雙罌遠く將に寄せんとす。
 且言不飲固亦高。且つ言ふ飲まざるも固より亦高し、
 舉世皆同吾獨異。舉世皆同じきも吾獨異なる。
 不如同異兩俱冥。如かず同異兩ながら俱に冥きに、
 得鹿亡羊等嬉戲。鹿を得て羊を亡ふ嬉戲に等し。「かれ、
 決須飲此勿復辭。決して須く此を飲むべく復辭するな、
 何用區區較醒醉。何を以て區區として醒醉を較せん。」

【題義】此詩は治平二年二月

鳳翔から朝に還り、史館に直する時の作である。紀昀いふ、旋轉自如、

止如三口語、而不落淺易、格力高也。然此種殊不易學、無三其格力、而以三類唐一出之、風斯下矣、

【詩意】高尚の士は、須らく酒を憐むべきであつて、韓退之が詩に、高士例須憐酒、とあるは、吾等が耳に熟して居る。然るに今更に説がある。それは酒は必ずしも高士に憐まれないといふことである。莊子の達生篇に、夫醉者之墜車、雖疾不死、骨節與人同、而犯害與人異、其神全也とある。又、彼得三全於酒、而猶若是、而況得三全於天乎とある。酔つたものは、車から墜ちても、醒めて居る人よりも怪我は少い。其の神が全いからである。そして、酒を全うするは天を全うするに及ばない。達人は本來、虧缺(かける)した所がないから、更に全きを求める必要がない。徐邈は志高くして行が深くあつた。併し尙書郎となつたとき禁酒の規があつたにも拘らず、邈は私に飲んで沈酔に至つた。阮籍は傲然として獨得、酒を嗜みて能く嘯く。畢卓は甕間に盜飲して酒を掌るもの爲に捕縛された。劉伯倫は酒杯を嗜んで形骸を遺る。酒を嗜み狂態をなすは、固より取るに足らない。然るに世俗は異を喜んで其の賢に矜る。特に杜陵の詩客(杜子美)は飲中八仙歌を作つて醉客を羣仙に比したのは、最も笑ふべきである。道に麴車に逢うて口涎を流したことも、帽を脱し頂を露はしたことも之を置いて問はない。(飲中八仙歌に道逢麴車一口流涎、脱帽露頂王公前とある。)八仙歌の中に、蘇晉長齋繡佛前、醉中往往愛逃禪とあるが、何れの處に能く禪を逃るるか問うて見たい。我は今、酒を飲まない。飲まないのではない。心の中が皎皎として常に孤圓である。時あつて客が來ると、亦爲に

中の八仙、即ち賈知章・汝陽王璣・李適之・崔宗之・蘇晉・李白・張旭・焦遂。羅列は、古詩鳴曲に、羅列自成行とある。【心月、孤圓】傳燈錄に、心月孤圓、光吞萬象。【二罌】晉書、孔融傳に、餽二罌酒。【得鹿失羊】列子の周穆王篇に、鄭人有薪於野者、遇竊鹿之御而擊之、恐人見之也、遂而藏諸隱中、覆之以蕉、不勝其喜。俄而遺其所藏之處、遂以爲夢焉、取而取之、既歸告其室人、曰、向薪者、夢得鹿而不不知其處、吾今得之、彼直夢者矣。列子の説符に、楊子之鄰人亡羊云云。【三】史記に孔子爲兒嬉戲。【醒醉】楚辭に、衆人皆醉我獨醒。

酌^くひ。琴^こは未^{いま}だ去^さらないが、聊^{いさ}か絃^{げん}を忘^{わす}る。(晉、陶潛傳に、性不^レ解^レ音、而蓄^ニ素琴一張、絃・徽^は
 琴^こ節^{せつ})不^レ具、每^ニ朋酒之會、則撫^ニ而和^レ之曰、但識^ニ琴中趣、何勞^ニ絃上聲。(我宗先生深意あつて、百
 里^りの遠方^{えんぱう}から兩罌^{りやうおうし}酒^{しゆ}を贈^{おく}らる。且^かついふ、飲^のまなくても固^とより高^{たか}い。舉世^{きよせい}皆^{みな}同じきも、吾獨^{われひとり}異なるは、
 同異^{どうい}兩^りつながら共^{とも}に忘^{わす}れて冥^{くら}きには如^しかない。鹿^{しか}を得^え、羊^{ひつじ}を亡^{しな}ふ、すべて兒戲^{じぎ}に等^{ひと}しい。須^すらく此^この
 酒^{さけ}を飲^のんで、復^{また}、辭^じすること勿^なれ。何ぞ區區^{くく}として醒^さめたの醉^ようたのなど比較^{ひかく}することを用^{もち}ひようぞ
 と。

309
65

終